

前後際断と有時の経歴

——道元禅師における「存在と時間」私考——

石 井 清 純

はじめに

本論は、道元禅師の「存在（現象の持続性）」と「時間（現象の変位性）」の定義について、『正法眼蔵』「有時」巻に示される、「有時の経歴」という句の持つ意味と、「現成公案」巻に示される「前後際断」という語の意味との関連から考察することを目的としたものである。

論を進めるに当たって、まず、前提となる概念規定を行っておきたい。

第一は、道元禅師の「悟り」の定義についてである。拙稿『『正法眼蔵』「現成公案」巻の主題について』（『駒澤大学仏教学部論集』二八号、一九九七年）において、筆者は、道元禅師は、世界全体を自覚的に把握することではなく、むしろ、自己の認識の限界を明確にし、その範囲内を完全に把握すると同時に、限界を超えた部分が認識されていないことを自覚的に認識すること、すなわち「認識の限界を認識する」ことを、

暫定的にはあるが「悟り」と定義していると、これが、道元禅師の修証論の基本となる継続的修行「只管打坐」の思想的基盤になっていることを指摘した。これがまず、道元禅師の空間認識の特徴であると考ええる。

続いて、事象の時間的変化については、拙稿「『前後際断』について」（『宗学研究』四〇号、一九九八年）において、同じ「現成公案」巻の「前後際断」という語に注目しつつ考察を行った。

その結果として、「前後際断」は、現在の瞬間を絶対視し、過去と未来を切り取るという刹那生滅的現状把握ではなく、むしろ、一つの属性、悟りの定義の延長でいえば、認識の限界を認識しつつ、その認識に基づいて継続的な実践を行っている期間、すなわち、事象がその事象としての属性を維持している期間、を意味するものであるとした。これらが、本論を進めるに当たっての、「時間」の概念の基盤に置かれるものとなる。

以下では、これら、「現成公案」巻における時間および空間の把握に対する定義をもとに、事象と時間との関連について「有時」巻を中心に再確認してゆく形となるが、論を進めるにあたり、岡島秀隆氏「『正法眼蔵』の時間論」(『印度学仏教学研究』三三巻二号、一九八五年)に示された、「道元禪師の『有時の而今』とは)論理的瞬間といったものを意味するのではなく、ある持続をとまなう今なのである」(六四八頁。括弧内は引用者)という見解に大きく影響を受けていることを明示しておきたい。

以下、この「持続をとまなう今」という発想を意識しつつ、具体的な検討に入ることにする。

一 道元禪師における時間(時)と存在(有)

「有時」巻における時間論の具体的考察に入る前に、先に挙げた岡島氏の解釈と対比的に、いくつかの業績を挙げておくことにする。

まず、鈴木格禪氏「『正法眼蔵有時』考」(『印度学仏教学研究』三〇巻二号、一九八二年)は、「『正法眼蔵有時』の根底にあるのは、生きた人間道元が、必死で求めた実存的苦悩であるということができる」(六〇〇頁)と表されているが、これは、道元禪師自身に限定しつつ、その「生存期間」に於ける苦悩を意識しているという点で、「有時」の持続性をも意識され

た解釈ということができよう。

それとはまったく趣を異にするのが次の二点である。

まず、角田泰隆氏「道元禪師の時間論——『正法眼蔵』『有時』を中心にして——」(『駒澤短期大学仏教論集』七号、二〇〇一年)は、次のように結論づけられている。

人生は、「今」「ここ」「このこと」を「生きてゆく」ということの連続であり、そこに懸命になるしかない、それが「有時」ということの実践であると思われる。(八九頁。傍線は引用者)

さらに、頼住光子氏「道元——自己・時間・世界はどのようにに成立するのか——」(NHK出版、二〇〇五年)も、道元禪師の時間の捉え方を、刹那的な一点に集約する解釈を提示している。

そこ(世界や存在が現成したところ)では、時は、もはや流れ去るものではなくなり、現在時制で、自己が時として把握する「今のこの一瞬」に連結される。そのような瞬間とは、まさに、時間を超えた永遠としての「空そのもの」の時間化という意味で、「永遠の今」ともいうことができるのである。(一〇五頁。傍線および括弧内は引用者)

以上の二つの論文においては、道元禪師の時間の概念を、過去と未来を現在に集約する方向で解釈しており、その点で、伝統的な『正法眼蔵』解釈を踏襲したものといえることができる。⁽¹⁾しかるに、すでに述べたとおり、筆者は「現成公案」巻における時間の観念を考察し、そこに「ある状況の維持」

という持続性の存在することを指摘した。同じ時間論を展開する「有時」巻において、それが同様な形で示されている可能性は極めて大きいという観点から、以下において、「有時」巻と、「現成公案」巻とを対比的に考察することによって、改めて道元の時間の概念を確認してみることにする。⁽²⁾

二 「有時」の定義

すでに各種の訳注によつて指摘されているところではあるが、論を進めるに当たつて重要となるため、「有時」巻冒頭の一節に示される道元禪師の特徴的な「有時」解釈について再確認することにした。

- ① 古仏言、有時高高峰頂立、有時深深海底行、有時三頭八臂、有時丈六八尺、有時拄杖扞子、有時露柱燈籠、有時張三李四、有時大地虚空。いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。（『道元禪師全集』〈以下『全集』〉巻一・二四〇頁）

- ② 仏法をならはざる凡夫の時節に、あらゆる見解は、有時のこ
とばをきくにおもはく、あるときは三頭八臂となれりき、あ
るときは丈六八尺となれりき、たとへば、河をすぎ、山をす
ぎしがごとくなり、と。いまは、その山河たとひあるらめど
も、われすぎきたりて、いまは玉殿朱楼に処せり、山河とわ
れと、天と地となり、とおもふ。しかあれども、道理この一
条のみにあらず。（『全集』巻一・二四二頁）

この引用は、「有時」巻の冒頭の一節である。傍線部が道

元禪師の「有時」に対する最初のコメントとなっている。

「有時」という語は、一般的には、「有る時払い」などと、お金などの流通する物品を所有していることや、あるいは、連綿と続く時の流れの中の一部を指す言葉として用いられる。禅籍においては、後者の意味として、時間や条件の場合分けに用いられることが多い。⁽³⁾

しかし、『正法眼蔵』「有時」巻においては、「有時」に、そのような意味のあることを認めつつも、それは、引用②に見られるように、「仏法をならはざる凡夫の時節」（波線部）であるとし、それとは違う解釈の存在することを示している。その特徴的な解釈が、引用①に明確に示されている。すなわちそこでは、傍線部のように、「いわば、『有時』とは、時（時間）はすでに有（存在）であり、有（存在）はみな時（時間）だということである。」と、「有時」を、存在と時間の一体性を意味した言葉と解釈している。これが、「有時」の語の基本的な定義となつているといえよう。

しかし、存在と時間の一体性を主張するといっても、それが単なる一元論的な世界観へと繋がるものではない。それを示しているのが次の一節であるといえよう。

- ③ われを排列しをきて尽界とせり。この尽界の頭頭物を時時
なりと觀見すべし。物物の相礙せざるは、時時の相礙せざる
がごとし。（「有時」巻、『全集』巻一・二四二頁）

ここでは、傍線部に見えたとおり、個々の事物がそれぞれに「時時」であることを見極めねばならないとされている。

それは、その前に見えるとおり、「われ」、すなわち個別存在の「排列」であり、それが世界全体であるという前提があるので、これは、それぞれの事物が個々に「時」を持っていること、その「時の流れ」が、個々の事物がそれぞれの属性を保ちながら存在している、あるいは変化している状況を示しているものと解釈できよう。

引用文②において、「有時」は、共有する時間の中から切り取られた一部ではないとされていた。そのことと考え合わせれば、先の「存在と時間の一体性」とは、つまり個々の事物が、それぞれに個別の時の流れを持っていることを示しているということになる。これはつまり、事物がそれぞれに固有の変化を示していることを意味しているともいえる。それが「時間としての存在」ということなのである。

しかし、このように時間軸を無数に設定しても、それらが妨げ合うことはないという。それが引用③の「相礙せざる」(波線部)という表現となる。つまり、そこには、個別の時間軸が有りながらもそれはあたかも並行して走る直線のように、交わりぶつかり合うことがない、その意味では、それぞれの時間軸は、個別に存在しながらも共通の属性を持って進んでゐるものであるということになるであろう。

前後際断と有時の経歴(石井)

以上のように、道元禅師の「時間」は、普遍的・画一的な「標準時」ではなく、それぞれの事象が保持している属性の中での個別的な流れ、あるいは変化を示したものであることになるといえるのである。

じつに、本論冒頭にて示した「前後際断」の定義は、この「個別の時間」の維持される範囲を示したものであるといえるのであるが、その「維持される状況」について、「現成公案」巻では、「法位」という言葉を用いて以下のように示されている。

④ たきぎ、はいとなる、さらにかへりてたきぎとなるべきにあらず。しかあるを、灰はのち、薪はさきと見取すべからず。しるべし、薪は薪の法位^aに住して、さきあり、のちあり。前後ありといへども、前後際断せり。

灰は灰の法位にありて、後あり、先あり。かの薪、はいとなりぬるのち、さらに薪とならざるがごとく、人のしぬるのち、さらに生とならず。しかあるを、生の死になるといふは、仏法のさだまれるならひなり、このゆゑに不生といふ。死の生にならざる、法輪のさだまれる仏転なり、このゆゑに不滅といふ。生も一時のくらゐなり、死も一時のくらゐなり。たとへば冬と春のごとし。冬の春となるとおもはず、春の夏となるといはぬなり。〔現成公案〕巻、『全集』巻一・三(四頁)

引用④においては、第一段落において「たきぎ」と「はい」という、連続して存在している事象が、じつはそれぞれ別個

の「法位」（波線a）にあり、それが「前後際断」（波線b）であると示されている。

それがさらに、「一時のくらゐ」（波線c）と表現され、四季の非連続性の喩え（傍線部）へと繋がっているのである。この、ある属性（ここでは「たきぎ」や「はい」）が、その性質を維持する期間が「法位」とされることから、「冬が春にならない」という喩えは、属性変更の境界線の不明確さを示しているかのような印象を受ける。

その点について確認する意味で、「有時」巻に示される四季に関する表現を見てみると、じつに、この「法位に住して」⁽⁵⁾いる期間について、その時間的経過を示す言葉として、「有時」巻では、「経歴」という表現が用いられており、かつその例示にこの四季の喩えが用いられていることがわかる。これらの概念規定を行う意味から、次節において、その例について考察してゆくことにする。

三 「法位」と「経歴」と「前後際断」

まず、以下に「経歴」の定義について見てゆくことにする。

⑤ 経歴といふは、風雨の東西するがごとく学きたるべからず。尽界は不動転なるにあらず、不進退にあらず、経歴なり。経歴は、たとへば春のごとし、春に許多般の様子あり、これを経歴といふ。外物なきに経歴すると参学すべし。たと

へば、春の経歴はかならず春を経歴するなり。経歴は春にあらざれども、春の経歴なるがゆへに、経歴いま春の時に成道せり。審細に参来参去すべし。（「有時」巻、『全集』巻一・二四四頁）

この一節において「経歴」（波線部）は、風が東から西へ変わるといった、「時間の経過による状況の変化」ではなく、世界全体の様相であるとされ、さらにそれを「春」に喩えて、「春」という単一属性の中に、「多くの様子」があり、それが他者を介在することなく存在していることであるとされている。これは、引用③の「われの排列」と同じ概念を示したもののといえる。

この例示と、先の「現成公案」巻における四季の喩えを合わせ考えると、「なるといはず」という四季の非連続性の主張は、それぞれ四季の境目の曖昧さ、すなわち、どこまでが冬でどこからが春かという境目のない一体性を示したものはなく、四季が、つねに春は春、夏は夏の「時間」を持って「経歴」しているという、四季が個別並立の関係にあることを示したものであると思われる。

「現成公案」巻では、この例示の前に、「前後際断」という、時間的な流れの分断を意味する単語が置かれているゆえに、どうしても、一本の時間軸を想定しがちであるが、それがじつは、四季でいえば四本が想定されていたということになる。

あくまでもそれらは、「相礙せず」(引用③)に存在している、それが、固有の時間を持つ事象間の関連ということになるであろう。

さらに、その具体的な形態については、次のように示される。

⑥ たとひ蹉過すとみゆる形段も有なり。さらにかれにまかすれば、蹉過の現成する前後ながら、有時の住位なり。住法位の活潑變地なる、これ有時なり。無と動著すべからず、有と強為すべからず。(「有時」巻、『全集』巻一・二四三頁)

このように、ある事象が、たとえ(仏法と)すれ違っているように見えても、それがそのまま「有時(存在)」の「法位」(波線部)であるとする。「蹉過しながら」とは、極めて強い表現であるが、事象の「経歴」の一部を切り取って判断することなく、「前後際断」された全体でこれを判断すべきことを示しているものと考えられる。つまり、事象が、それ自体の在り方を保持しつつ、移ろうものであるため、ある状況下にあつては、仏法に蹉過するものだったとしても、移ろい全体の流れ、すなわちその事象の持つ「時間」全体が、明確にその事象として働いていれば、それは、それ自体の在り方(法位)として認定されるということになる。

これをもつてすれば、道元禅師の事象に対する判断が、現時点へ集約される刹那的なものではなく、むしろ、ある事象

が存在している期間全体が意識され、それが個が個別並列的に持つ時間として捉えられていることが明確となる。

むすびにかえて

以上、「有時」巻を中心に、事象とそれの持つ時間について考察してきたのであるが、それは、「有時(時間としてある存在)」が、変化しつつもその属性を保持している状況を「法位」とし、その属性を維持する期間の変化を「経歴」と表現している可能性を示し得たと考える。

さらに、それら個々の事象間の関連性については、それぞれが並列して、「相礙しない」状態で存在しているものと推測したが、この点について、さらに『正法眼蔵』他巻における関連表現を、以下に二点挙げて考察してみる。

⑦ 仏仏相嗣するがゆえに、仏道はただ仏仏の究尽にして、仏仏にあらざる時節あらず。たとへば、石は石に相嗣し、玉は玉に相嗣することあり、菊も相嗣し、松も印証するに、みな前菊後菊如くなり、前松後松如くなるがごとし。(「嗣書」巻、『全集』巻一・四二四頁)

⑧ 悉是吾子は、子也全機現の道理なり。しかあれども、吾子かならず身体髪膚を慈父にうけて、毀破せず、虧闕せざるを、子現成とす。而今は父前子後にあらず、子前父後にあらず、父子あいならべるにあらざるを、吾子の道理といふなり。与授にあらざれども、これをうく、奪取にあらざれども、これをえたり。(「三界唯心」巻、『全集』巻一・四四五～四四六頁)

この二例は、それぞれに法の嗣続について触れたものであるが、まず引用⑦「嗣書」巻では、仏から仏への嗣続を、石・松・菊などの事象が、それぞれに属性を「印証」することによって嗣続するとしながら、それが、「如如」なるものとして扱われている。これは、渡す側と受ける側が、属性を共有しながらも、それぞれ個別の在り方として、すなわち、それぞれの時間を有しつつ存在していることを示したものといえよう。

続く⑧「三界唯心」巻では、仏弟子の在り方について、仏と仏弟子の先後関係を、子が父から身体髪膚を受けるように、同じ要素を持ちながら、それが必ずしも固定的に仏が前、弟子が後ということではないとする。これは、やはりそれぞれの事象の個別性を謳ったものといえよう。

以上のように、道元禅師の時間論は、従来のような、過去と未来を切り取って、現在へと集約してゆくものではないのである。確かに、過去が、今の記憶によって認識され、その今によって将来が予想されるという意味においては「而今」は重要であるが、それは一点に凝縮されるべきものではなく、「法位」にあつて「経歴」している事象のもつ「幅」の中で論じられるべきものである。

その意味からすれば、この「今」に、過剰な価値観を置くことは、道元禅師の時間論を誤ることになってしまう可能性

すら存在しているように思われる。むしろ、道元禅師の時間論の特徴は、それを普遍的な一筋の流れとして捉えることなく、個々の事象に個別に貼り付け、それそのものが属性を保ちつつ存在する期間を示すものとされているところにあるといえよう。

1 例えば、『正法眼蔵聞書抄』の経豪抄では、「有時」巻冒頭部分について、「十二時に就学すべしとは、午時は午時也、午時の外に余事不交、乃至自余事も可准之。（中略）高々峰頂立の時は高々峰頂立にて究尽し、深々海底行の時は深々海底行にて究尽せば、などか十二時の宗学にも相順ぜざらむ。」（『永平正法眼蔵蒐書大成』巻十二）とあつて、時空を一点に集約して解釈する方向性を示している。

なお、論の展開上、ここでは両者の論文を批判的に用いているが、その論を全面的に否定するものではない。むしろ、頼住論文には、個別相と時間の関連等、参考にさせていた部分も多い。

2 他に「有時」巻を集中的に論じたものとして、辻口雄一郎氏に、「『有時』巻における時間について」（一・二）（『宗学研究』二七号、一九八五年、『宗学研究』二八号、一九八六年）、『正法眼蔵における有と時』（一・四）（『宗学研究』二九号、三二号、一九八七年、一九九〇年）が上げられる。辻口氏は、西洋哲学との対比的考察によって、道元禅師の時間論を導き出そうとされているが、本論では、出典研究の立場から論じてゆこうとしているため、具体的に触れることはしなかった。

3 良く知られる一例としては、『臨濟録』『四料簡』『師晚参示

衆云。有時奪人不奪境。有時奪境不奪人。有時人境俱奪。有時人境俱不奪。」(大正四七・四九七上)が挙げられる。

4 頼住前掲書では、この「排列」を、我と他の多くの事象とを配列する(向き合わせる)方向で解釈しているが、本稿では、時間として転変する「われ」が、時間軸上に配列される意に解した。

5 この語は、『法華経』「方便品」の「是法住法位、世間相常住」(大正九・九中)に基づくが、その訓については、二種が伝わる。道元禪師においては、引用④の「法位に住して」、あるいは引用⑥の「住法位」という表現から、「是の法は法位に住して」と読んでいた可能性が示唆される。

* 『大正新脩大蔵経』の検索および引用にはSAT大蔵経テキストデータベースを、論文検索には日本印度学仏教学会インド学仏教学論文データベースを使用した。

〈キーワード〉 道元、『正法眼蔵』、有時、経歴、前後際断

(駒澤大学教授)

前後際断と有時の経歴(石井)

新刊紹介

田中 実 マルコス 著

黄檗禅と浄土教

萬福寺第四祖獨湛の思想と行動

A五版・三四五頁・本体価格七、〇〇〇円

法藏館・二〇一四年二月